



論語を「読む」レッスン：羊をめぐる争鳴

中川, 雅道

(Citation)

研究紀要：神戸大学附属中等 論集, 6:37-42

(Issue Date)

2022-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81013139>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81013139>



実践報告

論語を「読む」レッスン ―羊をめぐる争鳴

“Interpreting” the Analects of Confucius - Why should a sheep not be stolen?

中川 雅道

NAKAGAWA Masamichi

本来は多様な解釈が許されるはずである『論語』の章句を、漢字の意味、構文を辞書で調べ、小集団学習を用いて創造的に解釈する授業を行なった。先行研究を辿り、直躬の話のヴァリエーションを「読む」活動を繰り返すことで、儒家と法家の緊張関係を学ぶことのできる単元が完成した。

We can “interpret” various meanings from the Analects of Confucius. Students of Chinese classics examined the meaning of Chinese characters and syntax using dictionary. Thereafter, they discussed their interpretations via group learning. Previous research had identified many variations of the tale of Zhigong. I completed the teaching unit that illustrates the relationship between Confucians and Legalists.

キーワード： 子どものための哲学、漢文指導法、国語教育

Key words: philosophy for children, teaching Chinese Classics, teaching Japanese

學而時習之、不亦説乎。

学び続け、それが習うことだと知る。それこそが悦びなのだ。

(朱熹注) 人の性皆善にして、覚るに先後有り。後に覚る者は、必ず先覚の爲す所に效ふ。

I はじめに

子どもたちとともに『論語』を「読む」経験は、私がこれまで想定したこともないような経験であった。新鮮な驚きが芽生えるとともに、『論語』を「読む」経験は、私が大学、大学院で経験した西洋古典を「読む」経験と同じものであったという意味で、新しく古い経験であった。本稿は、その経験の中でも特に、単元の設定についての実践報告である。『論語』の単元を構想し、実践する中で生まれた、子どもたちとの対話の報告については、今後、別の稿で論じてみたいと考えている。

さて、冒頭に掲げた『論語』の冒頭の章句は、中学校でしばしば勉強して復習することが大事」というニュアンスで教えられるものである。しかし、朱熹注を踏まえると、この章句が、性善の発露としての「学」こそが、古の聖賢へとつながる悟りの

道であると主張しているように「読む」ことができるようになる。先人の注を頼りにしながら「読む」ことで、冒頭の拙訳のように、自分なりの新しく、かつ古い意味を、この章句から「読む」ことができる。私たちはいつからか、先人の注を読みつつ古典を訓読し、新たな意味を創造するという習慣を失ってしまった。

レッスン lesson とは、教え、教えられる関係に入ること、そのものである。「漢文」と呼びならわされてきた教材を教えるにはどうすればいいのかということを、論じてみたいと考えている。しかし、とりまなおさず、そのように論じる経験そのものが「学」というレッスンそのものであることをここでは確認しておこう。もともと私は、広い意味での漢文（詩文、説話などを含む）を専門的に学んだわけではなく、在学中は西洋語の古典に親しむ生活を送っていた。国語の教員として働きながら、

子どものための哲学という教育プログラムの研究に邁進するようになる中で、中国古典や中国学を専門とする方々と出会い、漢文の授業についての研究を始めることになった。本論文はその研究の一環として行われた。

今回の報告では、特に中国古典に教養が深いわけではない人でも、自分の関心から古典文献を調べることで、とても楽しい漢文の単元が完成する、ということが言いたいわけである。しかし、とはいってもやはり、「読む」ことのエッセンス、古典作品を辞書片手に読み漁り、先人の注を頼りにしながら創造的な意味を生み出し、それを仲間たちと深めていく「読む」プロセスだけはなしにはできないだろう。生徒たちの素直なリアクションを、私の視点から論じることで、漢文に悩む先生たちに、こんな楽しい授業ができますよ、と提起することを目指してみたい。

II 哲学資源として「読む」ための諸問題

さて、漢文の単元を、先ほど論じたような古典を「読む」という発想のもとで構想しようと思い立ったとき、孟子の性善説を含めた諸子百家の授業を試みようと思うようになった。性善説、性悪説の対立を含めて、儒家と法家の緊張関係、老荘による儒家批判など、百家争鳴の時代の中国思想は話題に事欠かない。また、学校教員の多くも、高校古典や高校倫理の授業で、この内容に触れているため、単元を構成する意味があると考えたからだ。しかし、教科書を眺めていたところ、多くの問題に行き当たることになった。

- ① 高校古典の多くの教科書（中学校の教科書も含む）に収録されている漢文教材は、慣例的に収録されてきただけの教材が多く、なぜその順番に配列されているのかといった根拠が薄い
- ② 漢文教材は、訓読文（訓点がつけられた白文）を書き下し文にして、意味がわかってちょっと面白いというくらいのところに目標が設定されている

- ③ 訓読文以外の情報が少ないため、どのような歴史的経緯でその章句が生まれたのか、といった背景知識。これまでどのように解釈されてきたかといった解釈史がない。当然、先人の注釈も掲載されていない。
- ④ 書き下し文から、現代語訳に取り組もうとした時に、ほとんどの教科書には現代語訳が掲載されていない（つまり、日本の教科書は学習者の視点からではなく、指導者の視点から作成されている）。また、例えば、複数の解读者による現代語訳の比較といった取り組みも見られない。
- ⑤ 句形という形で、書き下し文のルールは掲載されているが、外国語として白文を読解するという視点が薄く、単なる知識として理解されている
- ⑥ 高校倫理には、諸子百家の各思想の背景、主たる思想の内容、批判関係は掲載されているが、典籍から解釈するという視点に欠けている。高校古典では、諸子百家の典籍が掲載されているが③の理由から思想の全体を俯瞰できにくくなっている。
- ⑦ 複数の典籍を、一つの大きな単元のもとに「読む」という意識が薄い

もちろん、すべてを現行の教科書の責任にするつもりはなく、私自身出版されているすべての教科書に目を通したわけでもない。こういった教科書の欠陥を眺めていると、高等学校で行われている古典の授業の欠陥がはっきりと浮かびあがってくるように思えるのである。もちろん、漢文教材が古典の中でも一分野にすぎず、この分野だけに十分な時間を配当できないことを重々に踏まえたとしても、「バラバラに選択された訓読文を句形の知識を使って書き下し文に直し、（教員だけが知っている）現代語訳を教える」だけの授業になっていないだろうか。このように統合性を欠く状況こそ、「哲学」が必要とされるようになった文脈そのものであることは明白である。上記した論点は、それぞれ十分に検討されるべきである。

III 『論語』の章句を選ぶ

上記したような論点を乗り越えるために『論語』の章句を「読む」ことで「哲学する」授業を構想してみようと考えた。

『論語』は、孔子という人物の言行録によって構成されている文献である。孔子は、儒教的な年功序列社会の代表者として、あるいは教条的な人物として想起されることが多いようだ。しかし、『論語』のテキストに含まれる「弟子たち、あるいは様々な人たちとの対話」には、教条的な言葉というよりも、どこか血肉の通った言葉が残されている。伶俐な韓非子は、そういった章句を「矛盾」として批判したのだろう。

私自身が『論語』を読み進めていく中で、引っ掛かりを持った次の章句を、これまで授業の中で何度か取り上げてきた。

(原文) 葉公語孔子曰、吾黨有直躬者、其父攘羊、而子證之。孔子曰、吾黨之直者異於是。父爲子隱、子爲父隱、直在其中矣(子路、十八)。

(書き下し文) 葉公孔子に語げて曰はく、吾が党に直躬といふ者有り。其の父羊を攘みて、而して子之を證せり、と。孔子曰はく、吾が党の直き者は、是に異なり。父は子の為に隠し、子は父の為に隠す。直きこと其の中に在り、と。

(現代語訳) 葉公が孔先生に自慢げにおっしゃるには、「我が郎党には、おのれに照らしてどこまでも正直な行いをする者がいます。自分の父が、羊が来たのをさいわいかすめ取っても、子がそれを知らせました」と。孔先生がおっしゃるには、「私の門下生の正直さとはずいぶん違いますね。もし羊を盗むようなことが起こっても、父親は子供のために何とか隠そうとし、子供は父のために隠そうとする。正直さとはその中に見出せるものではありませんか」と。

この章句の不思議さは、「直」という概念をめぐる、葉公という統治者と孔子が対立することに

ある。そして、羊を盗んだ父(!)を、その子どもが統治者に告げ口した(!)ことを誉める葉公に対して、孔子がそれは「直」ではない。本当の「直」とは、子どもが親の罪を隠し(!)、親は子どもの罪を隠す(!)ことにあると自信をもって答えるところにある。探求に値する「不思議」だらけである。この章句を、読んだ後に「目の前で父親が物を盗んだとして、あなたは警察に言いますか?」と質問してみると、実に様々な反応を生徒から受け取ることができる。この章句に含まれる「矛盾」が、どうやら生徒の思考を促すようなのだ。

IV 授業の進め方について

さて、いったんここで、先述した様々な課題に答えるために構想した授業の進め方を紹介してみよう(もちろん、まだまだこれから改善していくための難形である)。

「読む」という行為が、非常に複雑な営為であるという考えは、教育現場にそれほど流通していないように思える。入学試験を含む、様々な読解問題に模範解答が示され、ひとつの解答を基準にして採点されると考えられていることが影響して、「読む」行為は、一つの意味を探り当てるゲームのようになっている。しかし、そもそも、ある問いに対する答えは多様なものであり、テキストの読み方は無限にある。このことを漢文の解釈に当てはめてみると、あるテキストの現代語訳は一つの解釈にすぎないということである。それでは、そのことを認めた上で、生徒たちが自分なりの創造的解釈を生み出すためには、どんなプロセスが必要なのだろうか。

まずは、テキストに登場する漢字、一語一語の解釈が求められる。語の解釈に使用されるのが、『漢辞海』(戸川芳郎監修、佐藤進・濱口富士雄編 2018)といった漢和辞典である。語の意味が分かったとしても、白文の文としての構造が分からなければ解釈はできない。二松学舎大学の報告書(佐藤進・小方伴子編訳 2006)から考えると、白文を書き下し文に直す時には、特に動詞などの品詞に留意しながら、語順を整えて意味を割り出していく

作業が求められる。このプロセスを生徒たち一人ひとりが辿るためには、とても時間がかかる。本校で育まれてきた小集団学習の手法を生かしつつ、解釈を進めていく。

過去の注釈、研究の提示は教員の役割である。現代語訳、教員なりの解釈を提示する際には、過去の文献を紐解き、注釈も確認しておく。そして、説明の際には、それはあくまで一つの解釈であり、多様な解釈がありうるということを常に、提示し続ける。

読み取られた意味を、自らの問題として考えることも同時に重要なことである。それゆえ、テキストの解釈を終えた後には、そのテキストの意味から考えることのできる問いを決めて、子どものための哲学の手法を活用して、対話を行う。

まとめよう。白文の解釈は自由に開かれている。ここまでで提示したプロセスをまとめると、次のような授業の流れになる。

- ① 白文を提示する（板書する）
- ② 辞書を引き、構文を調べながら、白文を理解しようとする（個人思考）
- ③ 小集団（4人グループ）ごとに、語の意味、構文の解釈を確認し合う。
- ④ 各小集団に担当文の解説を指示し、書き下し文と現代語訳を、黒板の白文を使ってクラス全体に説明する
- ⑤ テキストから問いを立てて、小集団ごとに問いを提示し、多数決で問いを選ぶ
- ⑥ 子どものための哲学の手法を用いて、選ばれた問いについての対話を行う
- ⑦ 振り返りシートに記入して、学習を振り返る

このプロセスを、テキストごとに繰り返していくのである。



写真 小集団活動の様子

V 羊をめぐる争鳴

さて、先ほどの『論語』のテキストの解釈を考える授業をしていたときのことである。（本校ではICT教育の推進のために各自がデバイスを持参して授業に参加しているので）ある生徒が解釈をネットで調べていたときに、驚きの声があがった。「あれ、先生。直躬さん刑罰を受けて、殺されてますよ！」え、そんな話は『論語』のテキストの中にはない。その後、調べてみると「直躬論」（松尾善弘 1990）という素晴らしい論文を発見した。この『論語』のテキストで示された論点は、どうやら諸子百家たちから様々な評価を受けていたようだ。性善説と性悪説についてのテキストを読むことを計画していたのだが、大きく方向転換をして「直躬」を最後までテーマにしてみることに決意した。

『呂氏春秋』と『韓非子』に「直躬」が登場するというのだ。さらに（松尾善弘 1990）では、老荘にも影響を与えていると論じているが、授業時数の関係で、その部分は泣く泣く割愛した。本稿では、以下の二つの文献をさらに、教材として提示したという報告までで、とどめておくことにしよう。

（原文）楚有直躬者。其父窃羊而謁之上。上執而将誅之。直躬者請代之。将誅矣，告吏曰，父窃羊而謁之，不亦信乎。父誅而代之，不亦孝乎。信且孝而誅之，国将有不誅者乎。荆王聞之，乃不誅。孔子聞之曰，「異哉，直躬之為信也，一父而載取名焉。故直躬之信，不若無信。」（『呂氏春秋』当務篇）

（書き下し文）楚に直躬なる者あり。その父羊を窃みて之を上（これ）に謁（かみ）ぐ。上執（つ）えて将（とら）に之を誅せんとし、直躬之に代わらんことを請う。将に誅せんとするに、吏に告げて曰わく、「父羊を窃みて之を謁ぐるは、亦た信ならずや。父誅せられんとして之に代わるは、亦た孝ならずや。信且つ孝にして之を誅せば、国将た誅せられざる者あらんや」。荆王（けいおう）之を聞き、乃ち誅せず。孔子之を聞きて曰わく、「異なるかな直躬の信（ゆえ）を為すや。一父にして載（ふた）び名を取る」。故に直躬の

信は信なきに若かず。

(現代語訳) 楚の国に直躬という者がいた。かれの父が人の家の羊を盗むと、かれは父を役人に告発した。役人が逮捕して誅殺しようとする。直躬は自分が身代わりになると申し出た。そこで、かれを誅殺しようとする。役人に向かっていった。「父が羊を盗めばこれを役人に告発する、これは信といえるではないか。父が誅殺されそうになると身代わりを申し出る、これは親孝行なことではないか。信もあり孝行でもある者を誅殺したならば、この国に殺されないですむ人間がいるのだろうか」。楚王はこれを聞くと直躬を赦して殺さなかった。孔子はこれを聞いていった。「おかしい話だ、直躬の信というのは、かれは父親を利用して二度も世間の評判をとっている」。だから直躬のような信ならば、むしろ信がないほうがましである。

『呂氏春秋』でも、直躬はやはり父親を告発するのだが、父親をかばって父親の代わりに刑を受けることを名乗りでる。しかし、いざ刑を受ける段になって、正論のようにも聞こえる論理を振りかざして、命をつなぐことになる。このバージョンでは、孔子は直躬が父親をだしにして、売名を行なったとして強く非難している。

さらに『韓非子』では、次のような展開になる。

(原文) 楚人有直躬、其父竊羊而謁之吏、令尹曰、殺之、以為直於君而曲於父。報而罪之、以是觀之、夫君之直臣、父之暴子也、魯人從君戰、三戰三北、仲尼問其故、對曰、吾有老父、身死莫之養也、仲尼以為孝、舉而上之、以是觀之、夫父之孝子、君之背臣也、故令尹誅、而楚姦不上聞、仲尼賞、而魯民易降北、上下之利、若是其異也。而人主兼舉匹夫之行、而求致社稷之福、必不幾矣、(『韓非子』五蠹篇)

(書き下し文) 楚人に直躬有り。其の父羊を窃みて、これを吏に謁ぐ。令尹曰わく、これを殺せと。以て君に直なれども父に曲なりと為し、

執えてこれを罪す。是れを以てこれを觀れば、夫の君の直臣は父の暴子なり。魯人、君に従いて戦い、三たび戦い三たび北ぐ。仲尼其の故を問う。對えて曰わく、吾れに老父有り。身死すればこれを養う莫しと。仲尼以て孝と為し、挙げてこれを上す。是れを以てこれを觀れば、夫の父の孝子は君の背臣なり。故に令尹誅して楚の姦は上聞せず、仲尼賞して魯の民は降北を易しとす。上下の利は是くの若く其れ異なるなり。而るに人主は匹夫の行を兼ね挙げて社稷の福を致さんとと求む。必ず讎われず。

(現代語訳) 楚の人で正直ものの躬というものがいたが、その父親が羊を盗んだときにそれを役人に知らせた。楚の宰相は「こやつを死刑にせよ」と命じた。君に対しては正直であるが、父に対しては悪いと考えて、これを捕えて罰したのである。このことからすると、君に対して正直な臣下というものは、父にとっては手に負えぬ子供なのである。魯のある人が君主に従って戦場にゆき、三度の合戦で三度とも逃亡した。仲尼がその理由をたずねると、「わたしには年老いた父親がいて、わたしが死ぬと養う者がおりません」と答えた。仲尼は孝行者だと考え、拔擢して上位につけた。このことからすると、父にとっての孝行というものは、君にとっては逆臣なのである。こうして、楚の国では宰相が直躬を罰したために、悪事をお上に知らせる者がいなくなり、魯の国では仲尼が逃亡者を誉めたために、民衆は平気で降参するようになった。上下の利害はこのように違っているのである。それなのに、君主はつまらない人物の行動をひろく取りあげて、それで国家の繁栄をはかろうと求めている。とてもかなわぬことである。

『韓非子』では、直躬のエピソードが儒家への批判として用いられている。韓非子は、ある行動が役人や国家といった為政者たちへの「公的な利」と、家族に対する「私的な利」は異なったものだ主張する。そして、儒家たちが「私的な利」を取り上げて絶対化することによって、国家運営がまなら

なくなると指摘するのである。怜悯で、常識的な反応であり、ある意味で、現代の読者にとっては共感を呼ぶ論理であるとも言えるが、下の利など取り上げる必要がないとする気迫には、どこか冷たさも漂っている。

もともとの計画から大きく離れた結果になったが、『論語』を「読む」ことから始めて、先行研究を辿ることによって、『論語』の章句のバリエーションを見つけることになり、結果的には、儒家と法家という思想潮流の間の緊張関係について学ぶことができたのである。

VI おわりに

最後に、小さなエピソードをもってこの稿を閉じることにしよう。この授業を、中学3年生に向けて行っていたときに、あるアンケートで生徒たちに「今後楽しみたいことや、楽しみにしていることなど自由に書いてください」と尋ねた。そのアンケートに、ある生徒が次のように答えていた。「漢文が結構好き」。

ちなみに、その生徒は「生徒が先生に告げ口することは良いことか」という問いが選ばれた対話の時間に、わざわざ家から持参した中公新書の『韓非子一不信と打算の現実主義』（富谷至、2003。中央公論新社。）を握りしめながら参加し、「みんなは韓非子が嫌いみたいだけど、私は韓非子が好きだから全力で擁護してみます」とえらく楽しそうに、自分の考えを話し続けていた。

百万の観察よりも、教師による正確な授業評価よりも、授業の楽しさを伝える、心からの言葉に触れて、今回の授業の手ごたえを感じたのだった。

注

本研究は基盤研究（C）「哲学資源としての漢文教材および学び方の開発に関する基礎的研究」（20K02730）の一環として行われたものである。

文 献

井波律子 2016. 『完訳論語』岩波書店。
金谷治訳注 1994. 『韓非子【第四冊】』岩波書店。

小路口聡 2006. 『「即今自立」の哲学——陸九淵心学再考——』研文出版。

戸川芳郎監修、佐藤進・濱口富士雄編 2018. 『全訳漢辞海 第四版』三省堂。

吹野安・石本道明 1999. 『孔子全書第7巻 論語（1）』明德出版社。

吹野安・石本道明 2002. 『孔子全書第7巻 論語（7）』明德出版社。

福島直恭 2019. 『訓読と漢語の歴史』花鳥社。

藤本一司 2017. 『「論語」と「西洋哲学」——「敬意」と「支配」の身体論——』北樹出版。

フランソワ・ジュリアン、中島隆博・志野好伸訳 2017. 『道徳を基礎づける 孟子 vs カント、ルソー、ニーチェ』講談社。

町田三郎 2005. 『呂氏春秋』講談社。

渡邊義浩 2020. 『全訳 論語集解 下巻』汲古書院。

湯浅邦弘編 2016. 『テーマで読み解く 中国の文化』ミネルヴァ書房。

小路口聡 2021. 『孟子』公孫丑上篇『人皆有不忍人之心』章を読む——哲学資源として漢文を『読む』——『白山中国学』 27: pp. 1-40.

小路口聡 2006. 「今、『孟子』を読むことの意味——『性善説』の現代的意義——」『Problématique VII—プロブレマティーク—』 pp. 1-24.

小路口真理美 2006. 「『親しむ』読みから『考える』読みへ——漢文教育の可能性を開く試み——」『Problématique VII—プロブレマティーク—』 pp. 148-163.

佐藤進・小方伴子編訳 2006. 「漢文文法と訓読処理——編訳『文言文法』——」二松学舎大学21世紀COEプログラム「日本漢文学研究の世界的拠点の構築」。

松尾善弘 1990. 「『直躬』論」『鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編』 42: pp. 183-197.